

# 若槻禮次郎コレクション ——岸清一家との書簡——

若槻禮次郎(総理大臣、1866～1949)と岸清一(弁護士、1867～1933)は、ともに松江の雑賀町で生まれ、同じ小・中学校で学び、ほぼ同時期に上京して身を立てます。大正期から昭和初期にかけ、禮次郎は政治家、清一は弁護士や大日本体育協会会長として日本を動かし、また在京の松江出身者の重鎮として、出雲育英会や東京出雲学生会の中心となって後進の指導に当たりました。二人はそれぞれの活動に際しての式典で祝辞を送りあうなど、公的な活動では席を共にしています。

しかし、現在のところ禮次郎と清一が談笑している写真や、互いにやり取りした手紙は見つかっておらず、私的な交流については深くわかっていません。

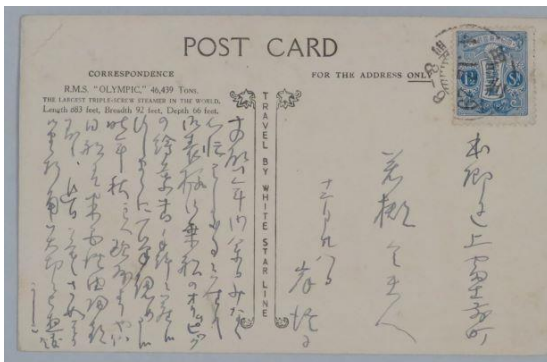
昨年、禮次郎の遺族から寄贈を受けた資料に禮次郎の妻徳子宛の書簡が多数ありました。その中に徳子と清一の妻澄子などがやり取りし家同士の交流があったことを示す書簡もありました。

今回の展示ではそれらの書簡を紹介して若槻家と岸家の交流を垣間見ます。

## 1. 若槻徳子宛 岸澄子 絵葉書 (昭和4年12月28日)

若槻禮次郎がロンドン海軍軍縮会議に出席するため豪華客船オリンピック号に乗り大西洋を横断中であることを知った岸清一夫人の澄子は、禮次郎の妻徳子に宛ててオリンピック号が描かれた絵葉書を送る。

この船は、清一が昨年秋に開催したアムステルダムオリンピックからの帰路に乗船したと伝える。

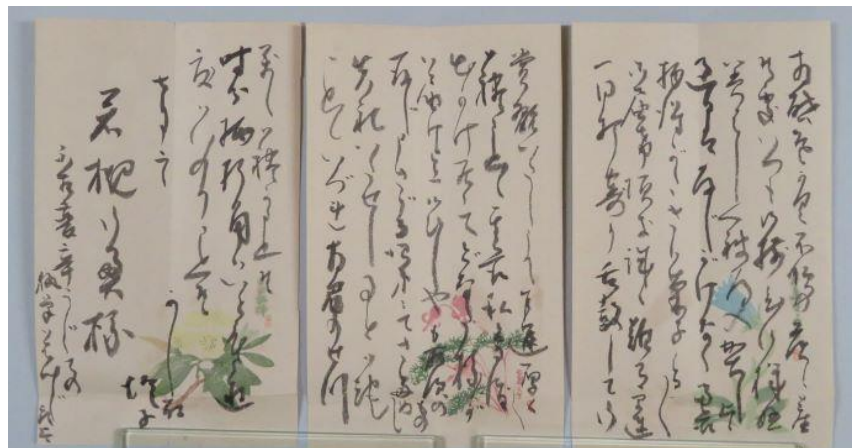


## 2. 若槻徳子宛 岸澄子 書状

(昭和17年7月2日)

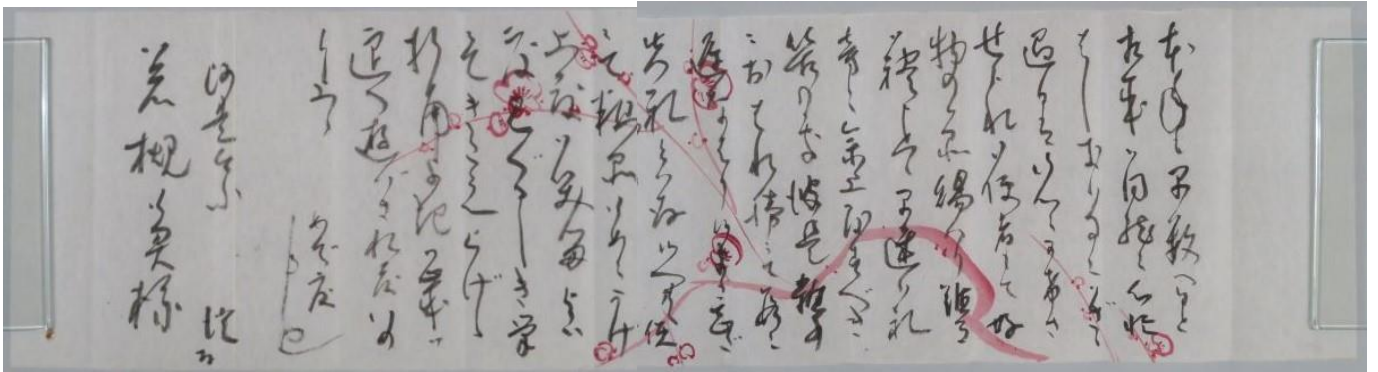
岸家が若槻家から「当節柄得がたき菓子」を贈られたことに対するお礼状である。

岸澄子は東京に住み、若槻夫妻は伊豆に住んでいたが、贈答品のやり取りがあり、会う機会もあったことがこの書状からうかがい知れる。



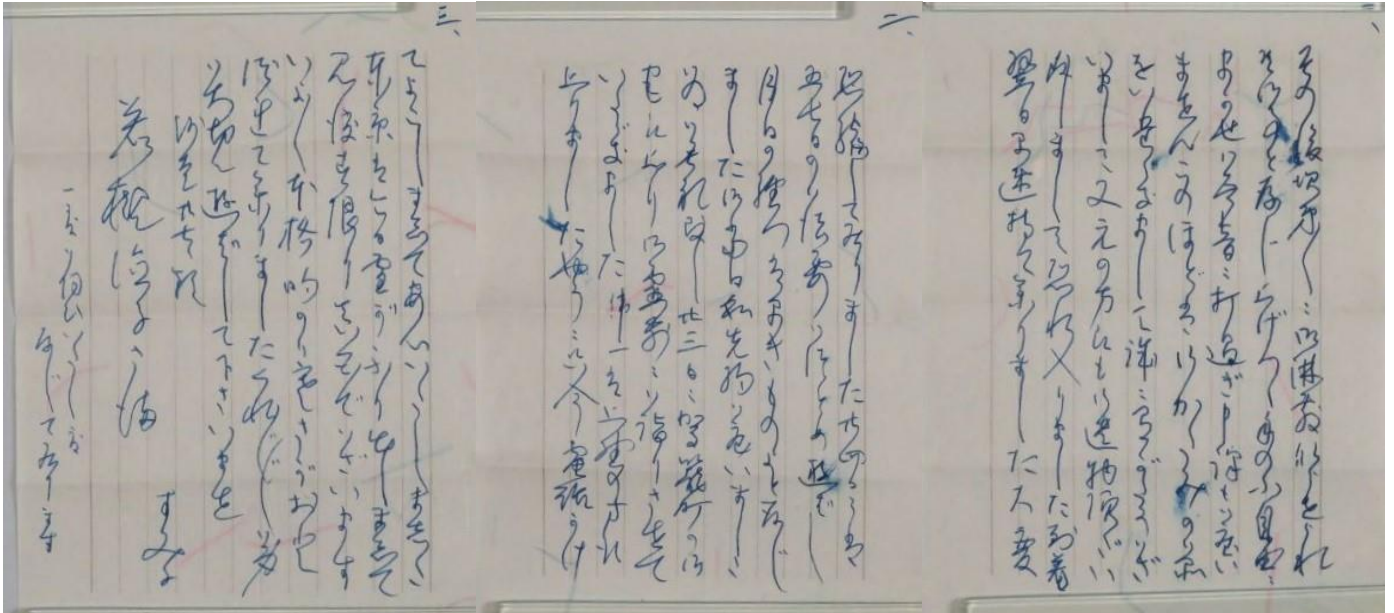
3. 若槻徳子宛 岸澄子 書状 (年未詳 12月)

岸家が若槻家から「好物の御品」を贈られたことに対するお礼状で、岸家からも粗品を添えて贈っている。12月(師走)の書状であり、歳暮のやり取りであろう。まもなく新年を迎えるため、その言葉も添えている。



4. 若槻徳子宛 岸澄子 書状 (昭和 24年 12月 27日)

若槻禮次郎は昭和 24年 11月 20日に伊豆の自宅で死去する。妻の徳子は死去に伴い、縁のあった人々に遺品を贈っている。岸澄子や清一の甥にあたる元にも贈っており、そのお礼状である。三十五日の法要には出られなかったが 12月 23日に禮次郎の霊前へお参りしたこと、一度お伺いしたいとも述べている。

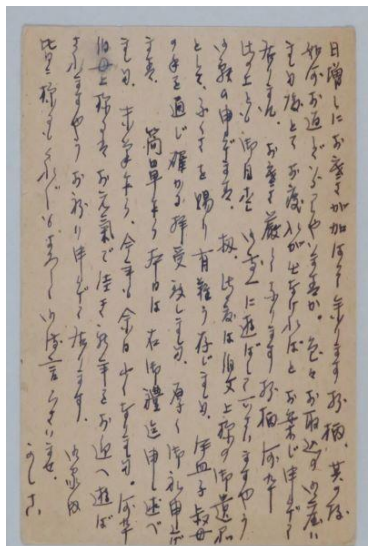


5. 若槻徳子宛 岸静江 葉書

(消印：昭和 24年 12月 20日)

岸清一の甥である元の妻静江が禮次郎の遺品を贈られたことに対してのお礼を述べている。岸澄子(伊皿子叔母)を通じて確かに拝受したと伝えている。

この手紙では静江は禮次郎を「伯父」、徳子を「伯母」と呼んでいる。清一の姉が禮次郎の兄に嫁いでいることもあり、両家が近い親戚づきあいをしていたことがわかる。



岸清一・澄子夫妻